現代教育学研究所FD＆SD講演会

2022.
2/8（火）
事前予約制
13：50 ～ 16：55
対象：中部大学の学生・関係者
不言実行館1階 アクティブホール

子供たちに伝統的な日本文化を伝えるために創設された心游舎の
総裁であらせられる彬子女王殿下に畏くも御登壇いただき、
心游舎における子供たちに対するお取り組みについてお話いただきます。
シンポジウムでは、現代教育における子供たちへの
伝統文化の継承について多角的な視点から討議します。

開会あいさつ
竹内 芳美 中部大学学長

特別講演 14:15 ～
「心游舎の活動について」
彬子女王殿下 一般社団法人心游舎 総裁

<プロフィール> 寛仁親王殿下の第一女子として誕生。学習院大学を卒業後、オックスフォード大学マートン・コレッジに留学。日本美術を専攻し、海外に流失した日本美術に関する調査・研究を行い、2010年に博士号を取得された。女性皇族として博士号の取得は史上初のことである。子どもたちに日本文化を伝えるために、ご自身で一般社団法人「心游舎」を創設、総裁に就任され、全国各地でワークショップなどを行われている。

シンポジウム 15:20 ～
「日本の伝統文化の継承と現代教育」

シンポジスト
彬子女王殿下 一般社団法人心游舎 総裁
山本 尚 教授 学校法人中部大学理事
石井 洋二郎 教授 中部大学大学院国際人間学研究科長
采睪（わけびき） 真澄 教授 中部大学現代教育学部幼児教育学科教授、現代教育学研究所運営委員
コーディネーター
深谷 圭助 教授 中部大学現代教育学研究所所長
司会
味岡 ゆい 講師 中部大学現代教育学部現代教育学科

<申し込み締め切り>
2022年1月28日（金）

<申込方法>
フォームよりお申込み
https://forms.gle/yAGwWaXUEAM76M2F6

フォームでのお申し込みに不都合がある場合は
Email：educa@office.chubu.ac.jp まで
以下の項目を記載いただきお申し込みください
・お名前　・ご所属　・学籍または職員番号

中部大学
主催：中部大学現代教育学研究所　共催：中部大学日本伝統文化推進プロジェクト　協賛：特定非営利活動法人こども・ことば研究所
お問合わせ：愛知県春日井市松本町1200 中部大学現代教育学研究所　直通：0568-51-4690　内線：8420，8422

現代教育学研究紀要　第16号　2022年9月，pp. 85–95

特別講演

心游舎の活動について

彬子女王*

The Activities in Shinyusha

Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa

要　約

本稿は、中部大学現代教育学研究所FD＆SD講演会・シンポジウムとして、2022年2月8日に中部大学不言実行館アクティブホールにて彬子女王殿下にご講演いただいた特別講演「心游舎の活動について」の記録である。

味岡講師：これより2021年度、現代教育学研究所FD＆SD講演会を開催いたします。本日の司会を務めさせて頂きます。中部大学現代教育学部現代教育学科の味岡と申します。よろしくお願いいたします。はじめに、開会の言葉を中部大学現代教育学研究所深谷圭助所長より頂きます。よろしくお願いします。

深谷所長：本日は、彬子女王殿下にお出まし頂き、研修会研究会が持てることを大変に幸せに思っております。彬子女王殿下どうもありがとうございます。ただいまから、中部大学現代教育学研究所主催、中部大学日本歴史伝統文化推進プロジェクト共済、NPO法人こども・ことば研究所協賛、現代教育研究所FD＆SD講演会・シンポジウムを開催いたします。本日はよろしくお願いいたします。

味岡講師：続きまして、中部大学竹内芳美学長よりご挨拶頂きます。よろしくお願いします。

竹内学長：皆さんこんにちは竹内です。本日は彬子女王殿下をお迎えして、現代教育研究所FD ＆ SD講演会・シンポジウムを開催できますことを、大学を代表と致しまして、御礼申し上げます。ありがとうございます。さて、中部大学は1964年に中部工業大学として開学致しました。開学20年目に中部大学と名称変更して開学し、すでに58年目を迎えております。現代教育学研究所は2007年に開設、そして翌2008年に現代教育学部を設置しました。「不言実行あてになる人間の育成」を建学の精神として教育を通し、社会に貢献できる学生の教育に邁進してまいりました。また、現代教育学研究所におきましても、現代的な教育諸問題について実践的な研究を進めております。今回の記念講演とシンポジウムのテーマは「現代教育における伝統文化の継承」と伺っております。日本の伝統文化継承の中心にいらっしゃいます、彬子女王殿下が熱心に取り組まれている「心游舎」総裁としてのご経験を今回お話しできるということを大変ありがたく楽しみにしております。中部大学の教職員・学生一同から多くの皆様方のご指示を頂き講演会・シンポジウムが開催できることを、嬉しく思いつつご挨拶にかえさせて頂きます。今日はどうもありがとうございました。

味岡講師：続きまして、本講演会企画の主旨、説明を現代教育学研究所深谷圭助所長より頂きます。よろしくお願いします。

* 心游舎総裁

深谷所長：それでは本講演会・シンポジウムの趣旨について申し上げます。グローバル社会が進行する現代において、伝統文化継承の問題は重要です。伝統文化を非日常の特別なものではなく人々の日常の中に息づくものとするならば、次世代の担い手である子ども達に生活の中にある伝統的な文化、習慣を見直し、経験させることは大切なことです。中部大学現代教育学研究所は、現代の教育に対して、いかに貢献しうるかを研究所のミッションと考えております。現在の教育に関してこのように貢献するということは大変に難しい問題ではあります。昨年度、本研究所から「コロナ禍における教育とポストコロナ時代の教育」という編著を刊行致しました。今回の現代教育学研究所FD ＆ SD活動では現代教育を考える視点として、「日本の伝統的な文化と文化の継承と現代教育」をテーマとして挙げ、このテーマに最も通じておられる特別な講師として、賢くも彬子女王殿下にご登壇頂くことになりました。彬子女王殿下におかれましては先ほど述べた本研究所の編著にご寄稿頂き、本研究所の活動に対する格別なるご理解を頂いております。特別講演では、彬子女王殿下に一般社団法人「心游舎」総裁として全国各地でお取り組みになられている、子ども達に向けた、日本の伝統文化に関するワークショップ諸活動についてお話し頂きます。コロナ禍においてはオンラインを積極的に取り入れられ、かなりの頻度で講演会を実施されております。続いて行われる特別シンポジウムでは、彬子女王殿下に加えて本学理事、教授、山本尚先生、国際人間学研究科長、石井洋二郎先生、そして当研究所副所長、釆睪真澄先生にご登壇頂き、現代教育における子ども達への日本の伝統文化の継承の問題について、多角的な視点から討議したいと考えております。今回のテーマは現代教育における古くて新しい研究課題です。FD ＆ SD講演会・シンポジウムによってもたらされた知見を現代教育学研究所における研究プロジェクトに活かしてまいりたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

味岡講師：それではこれより特別講演に移らせて頂きます。まず初めに、「心游舎」の紹介動画を上映させて頂きます。皆様、前方のスライドをご覧ください。

「心游舎」は平成24年、2012年に彬子女王殿下の「日本文化を子ども達に」という思いによって創設されました。日本の伝統文化を支えるヒトやモノが今、危機に瀕しています。大量生産・大量消費が当たり前となってしまった現代において、日本で古くから使われてきた手間暇かけた手仕事や、師匠から弟子へ受け継がれてきた芸能は、多くの若者にとって経験したことのない非日常のものになってしまっているのです。文化というものは生活の中で息づいてこそ文化といえると私は思います。すでに過去の遺物になりつつあるものを保全するだけでは文化を救うことはできません。現代社会の生活の中に取り入れ、日常の一部として活かすことができなければ、我々の記憶にある日本の伝統文化は衰退の一途をたどるばかりです。「心游舎」という名前は、このプロジェクトに参加して下さるたくさんの方達の心が遊ぶ、心を遊ばせられるような場所になればいいと思い、付けたものです。「心游舎」の活動の目的は、未来を担う子ども達が少しでも多く日本文化の記憶を持ち、
それを未来に伝えていくための場を再生することです。かつて文化人が集い、文化の発信拠点であった神社や寺が「心游舎」の活動の中心です。さまざまな分野で活躍する伝統芸能や美術工芸の担い手、日本の歴史・文化の研究者達が、子ども達に「本物」の日本文化を伝えます。それぞれの地域で育まれてきた伝統文化に注目し、楽しみながら生活の中に取り込んでいき、現代社会に日本文化を残す新たなカタチを創造します。
（「心游舎」紹介VTRより）

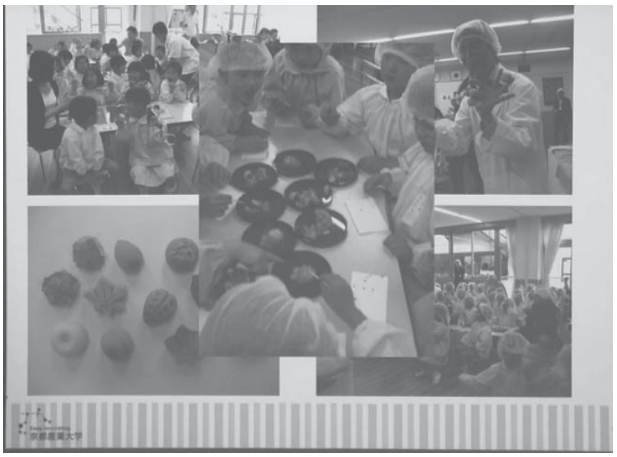
味岡講師：ご講演頂く彬子女王殿下のご紹介をさせて頂きます。女王殿下は寛仁親王殿下の第一女子としてご誕生されました。学習院大学を卒業後、オックスフォード大学マートンコレッジに留学され、日本美術を専攻し、海外に流出した日本美術に関する調査研究を行ない、2010年に女性皇族として初めて博士号を取得されました。子ども達に日本文化を

伝えるために、ご自身で一般社団法人「心游舎」を創設、総裁に就任され、全国各地でワークショップなどが行われております。本日は「心游舎」の活動についてと題し、「心游舎」における子ども達に対するお取り組みについてお話し頂きます。皆様、拍手でお迎えください。

女王殿下：本日はお招き頂きましてありがとうございます。深谷先生のご縁でこの場に立たせて頂くことができました。この「心游舎」の活動も今年の4月で10周年になりますが、深谷先生には、その創設の時からお手伝いを頂いて、先ほどの動画にも出てくださっておりました。今日は久しぶりに先生が噛み倒していらっしゃるお姿を見て、ホームのはずなのに緊張していらっしゃるんだとちょっと微笑ましく拝見しておりました。いつもの「心游舎」のワークショップでは、とても滑らかにお話になるので、「今日はどうしたのかな」と思いながら拝見しております。今日は私の活動しております「心游舎」のお話をさせて頂きたいと思っております。

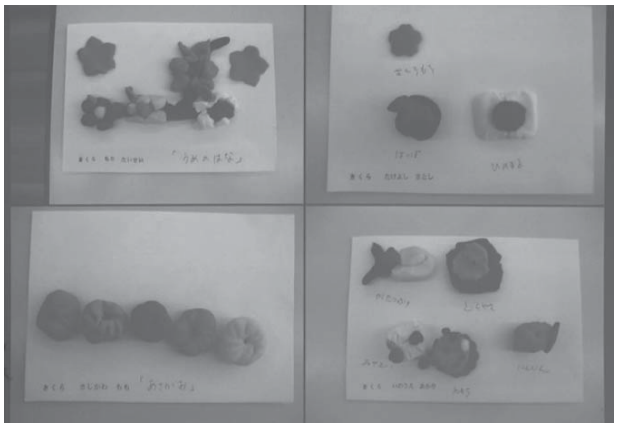
先ほどの動画でもご覧頂きましたが、私は子ども達に本物の日本文化を伝えていくために「心游舎」と言う団体を2012年の4月に設立致しまして活動をしております。「心游舎」は神社やお寺で日本の未来を担う子ども達に本物の日本文化に触れる機会を提供し、生活の中に取り入れるきっかけを提供する様々なワークショップを開催しております。かつて日本の神社やお寺は多くの文化人が集い、様々な文化の発信拠点であった場所でした。しかし今では冠婚葬祭や観光でしか行かないような非日常の場になってしまっています。その神社やお寺を子ども達がもっと気軽に集まり、共同体で育児ができる場所に戻すということが「心游舎」の目的の一つです。「心游舎」の活動の中心は、子ども達が生きた日本文化を自ら体験することのできるワークショップの主催です。祭り、伝統芸能、工芸など日本文化の本当の良さ・魅力は鑑賞することではなく、体験・体感することによって伝わるものだと思うからです。少し「心游舎」のプロジェクトについてご紹介しようと思います。

太宰府天満宮の幼稚園で、和菓子のワークショップを鈴懸さんにご協力頂き3年間続けて致しました。和菓子について知り、学び、作るというワークショップです。私が幼稚園の時にこんなワークショップに参加できたら楽しかっただろうという思いから企画を致しました。まずクイズで子ども達が普段、口にしているお菓子を和菓子、洋菓子、スナック菓子に分けてみるところから始めます。ここ（画像1左上）に和菓子、洋菓子、スナック菓子、例えばだいふくだとかケーキとかチョコレートといったお菓子を分けてもらいます。そしてこれ（画像1右上）は和菓子博士が、びわの実を和菓子に変身させているところです。普段自分達が見ている和菓子は、植物とか果物といったものが和菓子になってるんだよということを子ども達に知って貰います。私よりまだ少し上の世代の方達は、おじいちゃん、おばあちゃん達が羊羹を糸で切ったりするというのを、ご存知の方達がいらっしゃると思います。ですが今の子ども達はそういうことをしたことがないので、糸で食べ物が切れるということに大興奮していました。これからしばらく幼稚園では糸でいろんなものを切ってみるというのが流行ったそうです。



（画像 1）

そして、鈴懸さんの工場見学に子ども達と一緒に参りまして、9月に天神様にお供えを召し上がって頂く和菓子を粘土で作ってみるということを致しました。



（画像２）

この（画像2）粘土を渡すと、子ども達がみんな好きなもの、ピカチュウや、パトカーを作ってみたりする、そんな子達がいるのではないかなと思っていました。しかし、和菓子というものがどのようなものなのかをきちんと知った子ども達は、和菓子らしいものを作ってくれます。例えば朝顔だとか、梅の花とか、お餅とか、日の丸とかを作ってくれるので「子どもだから分からないだろう。」と勝手に思うのは大人のエゴなのだということを実感致しました。その時に子ども達のデザインから作ろうと決めたのが、梅の花と日の丸と菊の花の和菓子です。そして実際の材料を使い、子ども達が作って、天神様にご奉納を致します。実際に子ども達が作ったお菓子がこれ（画像3）です。本当に立派なものを作ってくれます。

（画像３）

3年間この和菓子のワークショップを致しました。初めての年は「餡子は嫌いっちゃん。」とか、「和菓子なんて普段食べん。」とかという子ども達がいました。その時は餡子を味見で出した時に、残す子ども達がかなり多かったのですが、ワークショップを始めてから、毎月のお誕生祭の時に出すお菓子をケーキから和菓子に変えてくださいました。その結果、年少さんの時から和菓子を食べ続けている子どもは、年長さんになるとこの和菓子のワークショップができることが嬉しくて楽しくて仕方がなくなります。一年目に餡子を残していた子供がいたことが信じられないぐらい、みんな舐めるようにして、餡子の味見をしていました。3年間和菓子を食べ続けてきた子供達は粒餡とこし餡の違いもよくわかりますし、「これはこし餡に粒餡が入ってるっちゃん。」と教えてくれます。かなり和菓子のエキスパートになっているところが大変興味深いです。幼稚園の先生に感謝をして頂いたことは、ケーキを誕生祭に出していた時は、卵、乳製品、小麦粉のアレルギーの子がいるので、その子には親御さんがお家からアレルギーでも食べられるお菓子を持たせていたらしいのですが、誕生祭のお菓子が和菓子に変わってからは、ほとんど同じものを子ども達が食べられるようになったことです。アレルギーを持っている子どもは、自分がお友達と同じ食べ物を食べられないということに対してすごく疎外感を覚えるようです。和菓子だとアレルギーを持っている子ども達でもほとんど同じものを食べられるということですごくうれしそうだ、ということを聞きました。すごく良い事を始められたんだということを思いました。

「心游舎」のワークショップが3年間終わり、天満宮幼稚園の方にお任せして、2015年からは独自に和菓子のワークショップをして頂いています。

（画像４）

これ（画像4）は、天満宮幼稚園の子どもが作った粘土細工です。先ほどの鈴懸さんの御菓子に見紛うようなお雛様のお菓子の粘土細工ですね。これはカステラですが、よく見るとちゃんとつぶつぶの空気の穴が開けてあります。これはいちご大福なのですが、中にしっかりイチゴが入っているのですね。大人が「切って売ったら売れないんじゃないの？」と言うのですが、子どもは中に餡子が入っているのを見せたいので「でも絶対餡子がちゃんと入ってるとこ見せたいから。」と言って、切って売るのです。天満宮幼稚園に和菓子のワークショップが根付いたことは、私にとってありがたいことでした。

また薬師寺でお能のワークショップをしたこともございます。本来は子どもが子役で出るときは直面といって素顔で出ますが、面をかけるという体験をさせて頂きました。私も面をかけて舞台を歩かせて頂いたのですが、視野が少ししかないので方向感覚が分からなくなります。だから能楽師の方は二足半でどのあたりに行くということが分かって動いていらっしゃるんだということが分かる体験をするわけです。このときはお能の面をつけるとか、小鼓とか、笛の体験をすることをしっかり教えて頂きました。私は中高時代に能楽鑑賞教室とか歌舞伎鑑賞教室に行ったことがございますが、すごく眠かったという記憶しかないのです。「早く終わらないかな。」と思っていたのですが、このワークショップでは寝た子どもが一人もおりませんでした。最初、能楽師さんが諸々の説明や土蜘蛛というお話をして下さっているときは、ぽかんとしている子どもが多かった（画像5左上）ので、「大丈夫かな？」と思っていました。しかし実際に体験をすると先生達がすごく厳しいのです。「声が小さい。」とか「もう一回。」と本気で指導をして下さるので子ども達もものすごくピリっとしていました。

（画像５）

また、笛と小鼓はなかなか音が出ませんでした。それを自分が教えて頂いた先生達が舞台に立ってとてもいい音を出していらっしゃるのです。すると、自分が実際やっただけに「凄いんだ先生。」ということがわかるんだと思います。本当に前のめりで見ておりました。

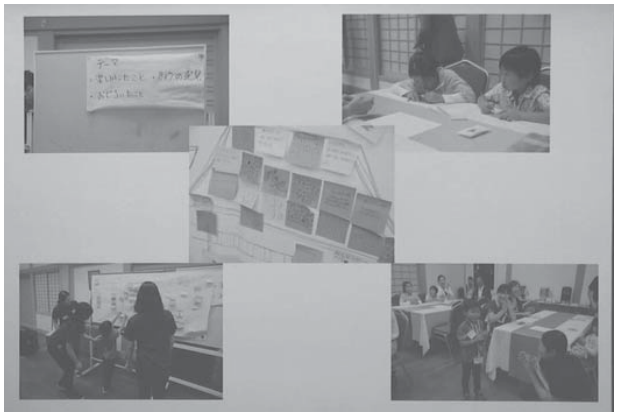
私が勤務している京都産業大学の学生と「心游舎」と上賀茂神社と共同で、毎年ワークショップをしております。これは最初の年の「神様の家を作ろう」という企画です。このときは上賀茂神社の御遷宮に合わせて檜皮葺のワークショップを致しました。そのときの学生がこの８人です。（画像6）

（画像６）

学生達が企画運営を致しました。まず、神社に参拝するというところから始めて、職人さんが檜皮をはいでいるところをみんなで見学して、実際に檜皮を剥ぐという体験を致しました。檜皮を葺いているところを実際に見学して、職人さんに教えて頂きます。

（画像７）

このお兄さんの口の中に竹釘がたくさん入っていて、湿らせてから、釘を打っていくのです。（画像7）口の中から竹釘が出てくることが子ども達はすごく面白かったみたいで、最後に感想を書いて貼った時「おじさんの口から竹30本」と書いている子どもを見て、よほど印象的だったんだろうと思いました。その後、みんなで感想発表会をしてもらいました。（画像8）



（画像８）

和菓子ワークショップの天満宮幼稚園の和菓子屋ワークショップの映像がございますので、少しご覧頂きたいと思います。

「心游舎」プロジェクト
和菓子づくり
太宰府天満宮幼稚園（の映像）

はい、ありがとうございました。

映像で出ていた、子供達が今年、高校受験という話を聞きまして、少しゾッとしております。自分自身は全然歳をとっていないつもりなのですが、子供達がどんどん大きくなっていることで「心游舎」もそれだけ歳を重ねてきたのだなということを実感しております。この「心游舎」の活動を通して私がいつも思っていることは、子供には早すぎるとか、子供にはもったいないではなく、子どもだからこそ本物の日本文化に早く触れてほしいということです。初めて飲んだお抹茶が美味しくなければ、初めて見た歌舞伎が面白くなければ、また飲みたい、また見たいと思えなくなるからです。だからこそ本物の人達に本物の日本文化を本気で伝えてもらっています。自分がやってみて楽しくないものは子ども達にとっても絶対に楽しくありません。私が子どもの頃にこんなことできたら楽しかっただろうなと思えることだけを企画しています。活動の原動力はなんといっても子ども達の笑顔です。「楽しかった。」「次は何やるの？」「また来るね。」と一つ一つの言葉が大きな励みになっています。楽しかった思い出は記憶に残ります。今はそれが何だったのかわからなくても、5年後、10年後にその記憶の種が芽を出して、幼稚園の和菓子ワークショップで和菓子を好きになったんだったなとか、お祭りに出たのがすごく楽しかったなとか、そんなことを思ってくれるようになればいいと思っています。楽しかった思い出を大切にすることが日本文化を大切にすることへと繋がっていきます。いつ芽が出るのか、もしかしたら一生芽が出ない種かもしれませんが、未来の日本のためにこの記憶の種を子供達の心にまく作業を「心游舎」の活動を通して続けていきたいと思っています。

そんな「心游舎」のワークショップも新型コロナウイルスの感染拡大により、中止や延期を余儀なくされました。活動ができない状況が続く中、何かできることはないかとスタッフ一同、頭を悩ませた結果、始めたのがZOOMを使ったオンライントーク

セッションの配信です。うっかり口を滑らせて余計なことを言いがちな私が出演するということで、生配信に対して当初は消極的な意見もありました。ただ、自粛期間が続き、オンラインで何かをするということに対するハードルが世間でも徐々に低くなっていく中で、だんだんとスタッフの空気感も変わってきました。「こういう時だからできない。」ではなく、「こういう時だからこそできる。」ことで、オンラインのトークセッションの配信を始めました。以来、1ヶ月に2回程度のペースで、「心游舎」では毎月オンラインセッションを開催しています。参加者は見るだけ、質問はチャットでのウェビナー形式のセッションは、お茶、夏越の祓、日本神話、日本のお菓子など様々なテーマで行っています。ここでは平均して40人から50人くらいの方達が参加してくださっています。毎回欠かさず参加してくださっている方もいますし、オンラインセッションを始めてから「心游舎」の会員になってくださる方も増えました。「子どもがいないので会員になってもと思っていたけれど、こういう催しに参加できるなら、ぜひ。」とか「静岡にいるので、なかなか地方でやっているイベントに参加できなかったけれど、オンラインで参加できるなら。」とか。私は画面の向こうの参加者の皆さんの顔が見られないのですが、皆さんは毎月私の顔を見ておられるお陰でかなり頻繁に会っている気分になられるそうです。数ヶ月ぶりに会った友人にも「先週オンラインセッションで拝見したので、久しぶりの気がしない。」と言われました。また、ご自宅のパソコンやスマートフォン越しに私を見るので、とても身近にいる感じがするようです。そのように思っていただけるようになったのも、オンラインセッションの良さの一つであろうと思います。オンライン配信を始めてよかったことはたくさんあります。何よりも定期的に、頻繁に配信を行うようになったことで、「心游舎」を会員の皆さんが身近に感じてくださるようになりました。今までは私も体が一つしかありませんし、公的、私的の仕事がある中で「心游舎」のワークショップで全国を回るのは1ヶ月に1回、年間10回程度が限界でした。でも、オンライン配信はインターネットの環境さえあれば、日本中どこにいても前後の数時間、予定を確保するだけで可能になります。配信を始めたことで、より多くの方達が「心游舎」の活動に興味を持ってくださいました。更に、お茶の楽しみ方やお米の美味しい炊き方、年中行事の大切さなど、日常に役立つお話をすることが多いので、「早速今日からやってみます。」とか、「これから和菓子を買いに走ります。」などと、すぐに実践してくださる方が増えました。日本文化を生活に取り入れるきっかけづくりをするという意味では、大いに目標を達成できているのではないかと思います。

「心游舎」の活動を始めて気づいたことの一つに「なんで」の力があります。子どもはわからないことがあると、何でも「なんで？なんで？」と聞きます。私達は大人になるにつれ「なんで？」と考えなくなります。「なんでかようわからへんけど、そういうもんやから。」思ってしまうようになります。この考えることをやめるというのはとても危険なことです。間違ったことを正しいこととして認識してしまう可能性もありますし、いざというときにきちんとした判断をできなくなってしまう可能性もあります。

以前、石清水八幡宮でワークショップをした際に境内を散策したことがありました。そのとき参加していた子どもの一人に、境内に点在する摂社・末社を見て、「この神さんは三人で小っちゃいお家に住んでいるのに、こっちの神さんは何で一人で大きいお家に住んではるの？」と聞かれました。そんなことを疑問に思ったこともなく、私は答えてあげることができませんでした。神職のお兄さんに聞いてみましたが、彼もその質問に答えることができませんでした。その時は「今度会うときまでに勉強しておくね。」と言ったのですが、その後少し茫然と考えてしまいました。後日、宮司様にお伺いしたところ、「本来は大半の神社が産土神をお祀りするので一柱だったと思うけれど、時代が重なるにしたがって八幡さんや天神さん、大国さんや御諏訪さんなどを合祀するようになったと考えられる。本来は一社に一柱が当然のお祀りの仕方だけれど、御殿にお祭りするのはその御霊代なので、小さなお社でも、何柱でも、お祀りできる。その神社を信仰されるその時代の氏子などの要請によって、何柱の神々が祀られているのであって、お社の大小には関係なく、神々の神威は全てに照り輝くのですよ。」と教えてくださ

いました。この子に「そういうもんやねん。」と言ってしまうのは簡単なことです。でもそれはせっかく芽生えた彼女の興味の芽を摘んでしまうことになります。この時以来、私は子どもの質問には正確な答えを返さなければいけないと思うようになりました。

私の父は子どもを子供扱いしない方でした。親子というよりは、先輩、後輩のような関係であったように思います。怒られるときも自分がなぜ不愉快になったかを説明され、私や妹がただ闇雲にごめんなさいと言っても許してはくださいませんでした。逆に私達がなぜこのような行為を取ったかをきちんと説明し、その理由に納得できれば、相手が娘であっても悪かったと謝れる方でした。勉強で解らないことがあって、私が何か質問すると自分が解らないことであれば、食事中であろうと夜遅かろうとその場で自分の知り合いの専門家に電話をして、娘にわかるように説明してやってくれと、私に電話を代わらせました。そして私が納得するまでその方と話しをさせました。父は中途半端な答えは絶対に返されませんでした。

石清水の子どもから質問されたことで、私はようやくその父の教育方針に気づくことができました。それは私にとって本当に大きな発見でありましたし、そのことによって私は多くのものを得ることができたように感じています。それから私は日常の些細なことでも「なぜ？」「なんで？」と考えるようにしました。そんなある日、ある人からなぜ皇族は帽子をかぶるのかという質問をされました。それまで私はそんなことを考えたこともありませんでした。これこそ私の生まれる前から決まっていたことで、私自身そういうものだと思っていたことそのものでした。そこで私は祖母である三笠宮妃殿下に伺ってみたところ、「帽子は日よけなのよ。」という答えが即座に返ってきました。帽子をかぶるという習慣は明治期にヨーロッパから入ってきたもので、当時のヨーロッパでは、「もしその人物が家の中に入ってきて、帽子を脱ぐようなら真の紳士、帽子を脱がないのなら、紳士のふりをしている男、そして帽子をかぶっていない人物は紳士のふりをすることさえ諦めている男」という言い回しがあったそうです。つまり帽子は日を除けるものですから、室外ではかぶり、室内では脱ぐものでした。室内なのに帽子をかぶっているというのは、そんなルールも分からない田舎者であるということだったのでしょう。日に焼けているというのは、それだけ長時間外にいる仕事をしているということで、労働者階級と貴族階級の差を示すものでもあったのかもしれません。ただ、女性の場合、帽子はファッションの一部とみなされますので、室内でも取ることは致しません。

例えば平成の時代、12月23日の天長節の際の一般参賀で皇后陛下は、お帽子をかぶっていらっしゃいませんが、ほかの女性皇族方はかぶっていらっしゃいます。これは宮殿が皇后陛下にとってはお家の一部とみなされますので、外に出て日をよける必要がないのでかぶられないのです。ほかの女性皇族方は一度お外にお出になってから宮殿にいらっしゃいますので、日よけとして帽子をおかぶりになっているということです。また4時以降の行事の時には帽子をかぶらないということになっているのですが、これも夕方4時以降は日をよける必要がなくなるからです。今まで何気なく続けていたことでしたが、三笠宮妃殿下の「日よけなのよ。」の一言ですべてが腑に落ちました。これを知る前は帽子をかぶるなんて時代錯誤だからやめたらなどと言われたら、「そうかもしれないな。」と思ってしまっていたかもしれません。でもこのことを知ってからは、きちんとこの伝統を伝えていかなければと思うようになり、行事の時にはきちんと帽子をかぶるようにしております。全ての物事には行われる理由があります。それがなぜ行われているかを考えてみることでその理由を知ることができます。理由を知ることで深く理解ができます。深く理解すれば意味がわかります。意味が分かれば自分のものとなり、おのずと心に残ります。つまり「なんで」の芽を摘み取らず育てていくことが必要なのではないかと私は考えております。

例えば、皆さんに質問です。ご飯を食べる器のことを何というでしょうか。茶碗ですよね。なんでご飯を茶碗で食べるのか、疑問に思ったことはありませんか？茶碗はご飯を入れるものですが、別の物もありますよね。ご飯を入れる器を茶碗というけれども、お茶を入れる器のことも茶碗といいます。本来、ご飯を入れる器で飯椀という言葉があります。しかしなぜ茶碗でご飯を食べるのでしょうか。漢字を並

べてみますと、「茶碗」と「飯椀」、何か違いを感じられますか？

小さく聞こえますね。言葉にうるさい方がたくさんいらっしゃると思うのですけれども……ありがとうございます。茶碗の偏は石偏で飯椀の偏は木偏です。茶碗は焼き物なので石偏。飯椀は木偏、漆の器で作られています。焼き物というのは、熱伝導率がとても高い素材です。本来はお茶を入れて、飲むときに使う器です。熱いお湯を入れても熱伝導率が高いのですぐに冷めますから、熱いお湯を最初に入れても口元に持ってくるときには、ちょうど適温ぐらいに冷めているのです。特にお抹茶というものは三口半で頂くもので、温かいまま保っておく必要がないわけです。なのでお茶というのは焼き物の器で飲むのが一番適しているわけですが、ご飯は最後まで温かく頂きたいものですね。木は熱伝導率が逆に低い素材です。これでさらに上から蓋をするので保温効果をより高めます。そのため、ご飯は本来漆の器で頂くものだったのです。皆さん汁椀はいまだに漆の器を使われていると思いますが、このような理由があるわけです。なぜこの漆の器でご飯を食べなくなったのかと言いますと、江戸の後期ぐらいだと思いますが、漆の器は焼き物に比べて高いですし、扱いが面倒だと思っておられる方も多かったと思います。こちらから近い瀬戸で焼き物が全国的に出回りまして、焼き物といえば瀬戸物と言われるようになったぐらい焼き物がかなり安い値段で全国に出回るようになりました。そこで「このお茶を入れる器でご飯を食べたらいいんじゃないの。」と考えた人がいたんでしょう。「だったらなんか安いし、割れちゃってもそんなに悔いが残らないから、このお茶の器でご飯食べる物の代わりにしたらいいじゃん。」と思った人がいたんだと思います。それが全国的に広まったので、この茶碗でご飯を食べるという習慣が根付いたということです。だから、我々が使っている茶碗は本来だったらこの石偏の飯碗のはずなのですが、茶碗でご飯を食べるという習慣が始まったわけです。このようなことは少し疑問に思えば、「あれ？」と思い返せるものだと思うのです。これが当たり前のように思ってしまうと、何も疑問に思わないまま通り過ぎてしまうものだと思います。私もこの話を聞いてから漆の器でご飯を食べるようになりました。やはり全然違います。ご飯の水分を木ですので上手に吸ってくれますし、温かいまま乾かずにご飯を頂けます。お茶漬けをした時に口元に漆の器を持ってくると、やはりひんやりする感覚が全然違います。この焼き物の聖地のようなところで「漆の器がいいよ。」とお話しするのはちょっと憚られますが、もともとご飯は漆の器で食べるものでしたのでぜひ漆の器で食べてみて頂きたいなと思います。やはり少し高いなって思われる方もおられるかもしれませんが、漆の器はよくもちます。硫酸をかけても大丈夫なぐらい丈夫な器なのです。だから洗剤とスポンジでゴシゴシ洗っても特に問題はないですし、少し剥げてしまったら塗り直しに出せば10年、20年と使えるものです。一回買ってしまえば決して高い買い物ではないかと思います。焼き物はなかなか継いでも同じように使えなかったりしますが、そう考えると漆の器を買うのも決して高い買い物ではないと思います。なのでぜひ漆の器でご飯を食べるというのをやってみて頂きたいと思います。

こういったことは学校で教えられることではなく、子どもの頃から生活の中でいつの間にかおじいちゃんやおばあちゃんに教えてもらってわかってくる感覚だと思います。朝一番にお仏壇にお供えをしてお参りをして、何か頂き物をしたら神棚とか仏壇にあげてからお下がりを頂くといったことは、当然のように昔から行われてきたことであり、日常の中で子どもたちは神様や仏様を敬う心を自然に身に付け、知らず知らずのうちに日本文化に触れていたものでした。でも最近は神棚やお仏壇がある家も少なくなり、神社やお寺の境内で子どもたちが遊ぶ姿もあまり見られなくなってしまいました。最近は親や学校の先生を含め、大人から怒られるという経験があまりない子も多いように聞きます。お寺や神社の境内で遊んでいるときに住職さんとか神主さんに怒られたりとか近所のおじちゃんおばちゃんに怒られたりとか、そこから礼儀や社会生活のルールを子供たちは自然に学んでいたのではないかと思います。地域みんなでお節介上手だった世の中が、個人主義の世の中になってしまっていますが、地域みんなで子どもたちを育てていこうという発想を取り戻していけたらいいなということを思っております。

グローバル化という時代の中で英語が小学校で義

務化されています。日本語がきちんと話せないと英語もきちんと話すことはできないと思います。子どもに国語を重点的にきちんと伝えるべきだと私は思います。先ほどもお食事の時にお話していたのですが、やはり海外に出たときに自分の国についてきちんと説明できる子どもを育てていくということが重要ではないかと思います。

私がイギリスに留学していた当時は、理系の人であってもオペラとかクラシックのコンサートとかバレエとかそういったものに日常的に行く人たちは本当にたくさんいましたし、シェイクスピアの話を普通にできる方達がたくさんいます。

世界で最古の物語と言われ、日本の誇るべき源氏物語について日本人できちんと外国の方に説明できるかというと、説明できる人は本当に一握りだと思います。やはり日本という国に自信や誇りを持って、まずは日本語で自分の国のことをきちんと説明できるようにならないと、それをまた外国の人に向けても説明することができません。まず自分自身に自信を持つところから始めるべきだと思います。日本という国に誇りを持って海外に向けてプレゼンテーションができるような子どもを育てていかなくてはと思います。

先ほどから伝統という言葉を何度か使いましたが、「伝統」という言葉は糸偏の統という字を使います。この統という字は血統や正統の言葉がある通り、一筋の線になっているところから一つ一つがつながって一本になっていることから、この伝統という言葉に使われていますが、もともとは燈火を伝えるという「伝燈」という言葉であったのではないかと言われています。比叡山の延暦寺には不滅の法灯という燈火があります。最澄さんが比叡山を開いたときにつけた燈火は1200年経った現在でも絶やすことなく伝えられてきています。織田信長の延暦寺焼き討ちがあって一回そこでもちろん途絶えてしまってはいるのですが、もともとその不滅の法灯の燈火を分火してあったところからもう一回持ってきて、その不滅の法灯は途切れずに延暦寺に残っているわけです。師匠から弟子に教えを授けるということを伝燈といいます。仏様の教え、燈火を次の弟子に伝えるということを伝燈というのです。師匠から弟子にその又弟子にその又弟子に、仏様の教えが伝わって一本の筋のようになっているということで、この糸偏の伝統という字が使われるようになったのではないかというお話があります。油断大敵という言葉があります。比叡山では、不滅の法灯の燈芯と油の当番の人がいるわけではないそうです。その場にいる気づいた人がそろそろ油を足した方がいいなとか燈芯を替えた方がいいなということを自分で判断して替えるというシステムで、それを1000年以上の長きに亙って伝え続けてきたことによって現代に至っているわけです。油を替えるとか燈芯を替えることはすごく簡単なことのように思いますが、この簡単なことである油を絶ってしまう、それを怠ったことによって1000年続いてきた燈火が消えるという大変なことになるということで、この油断大敵という言葉ができたのではないかと言われています。諸説ありますが、その中の一説です。比叡山を開いた最澄さんは「明らけく後（のち）の仏の御世までも光りつたへよ法（のり）のともしび」と言う歌を残しています。師匠から弟子に燈火を伝えていくように我々大人達が子ども達に日本文化の燈火を伝えて、それがまた伝統という一つの線になっていったらいいなということを思っております。本日は長時間にわたりましてご清聴ありがとうございました。